

2007.9.15 ぴーすとれど講座 Vol.2

2007「PARC 自由学校 東ティモール・エクスポートツアー」報告

ほっかいどうピースレード 荒井久代

■はじめに

8月1日から8月9日、NPO 法人アジア太平洋資料センター (PARC) 主催の「自由学校 2007 エクスポートツアー——東ティモール フェアトレード・コーヒー生産者に出会う旅」に参加しました。

東ティモールは、長年、ポルトガル、日本、インドネシアの侵略と支配を受けてきましたが、2002年5月に独立しました。それに先立つ1999年、国連監視下の住民投票でインドネシアからの分離が決まりましたが、国連の撤退後にインドネシア軍と民兵による虐殺、強奪、放火が続きました。PARCでは、同年10月から他のNGOとともに支援を開始。その後、PARCでは、学校再建支援プロジェクトや水を引く事業、コーヒー生産者支援などに着手し、2002年からマウベシ郡内の集落単位ごとに生産者共同組合を組織し始めました。2007年には2グループが新しく加わり、組合への参加は8グループになっています。

私は、北海道で東ティモールコーヒーを広めようと、このほど発足したほっかいどうピーストレード (HPT) に、縁あって関わることになりました。そのメンバーで、一昨年、このツアーに参加したことのある仲間に、参加を勧められました。不勉強なと札幌から離れた釧路に住む身では HPT の名ばかりのメンバーになるのではと危惧していたところでしたので、現場主義をめざして、行くしかないと即決しました。

PARC ではスタディツアーではなくエクスポートツアーと呼んでいます。エクスポートツアーは、見るのではなく見極める、聞くだけでなく聞き分ける、知るだけでなく感じる、ことだといわれています。ツアーに参加して、その理由を自分なりにですが、感じ取ることができました。一粒のコーヒーがとても貴重なものになりましたし、生産者との温かな出会いがフェアトレードのあり方を考えるきっかけにもなりました。

東ティモールは今も貧困との闘いが続いています。農民の収入源はコーヒーしかありません。唯一の輸出品もコーヒーと言っていいでしょう。より多くの人に、このコーヒーを飲んでもらいたいと心底思いました。

ここでは、日記の形でツアーの報告をしたいと思います。テープレコーダー持って行ったわけでもなく、メモと記憶が頼りです。誤りがあるかもしれません。雰囲気だけでもお伝えできれば幸いです。そのようなわけで、無断での転載や引用は固くお断りいたします。

■8月2日：東ティモール到着

バリ島のデンパサール空港から2時間でメルバチ航空機はディリ空港に到着し、強烈な陽射しと乾いた空気が出迎えてくれました。入国手続きは、まず空港の建物に隣接するブレハブのような建物の外に並んで行われ、しばらく待つ間に、汗が噴き出した顔に黄土色

の土埃がはりついてきます。空港の外には PARC 東ティモール事務所の伊藤淳子さん（以下 淳子さん）が、凜とした立ち姿で待っていてくれました。女優の菊川怜さんか往年の大女優・乙羽信子さんにも似て美しく、聡明そうな笑顔も、ゴム草履姿もステキです。

PARC の出迎え車に乗って私たちは PARC 東ティモール事務所へ向かいましたが、空港には銃を持った兵士や警官、国連警察の車両も少なからず見かけました。街の中には昨年できた難民キャンプ^{注1)}や 2001 年に焼き打ちされたままの建物が散在しています。現在のディリの失業率は 50% だそうです。この国の容易のない状況を垣間見た気がします。

注 1) 2006 年 4 月、東ティモール国防軍の中で待遇改善を要求した兵士約 600 名全員が除隊処分となり、デモを行い、国家警察との衝突が起こった。それが拡大し、暴徒も出現し、発砲、投石、放火などが続き、死傷者が出た。いったんは沈静化したように見えたが、5 月下旬には状況が悪化し、銃撃戦なども繰り広げられ、多くの市民が、地方や難民キャンプなどに避難した。

■ 8 月 2 日：PARC 東ティモール事務所でのオリエンテーション

○参加者 8 名とスタッフの自己紹介が行われました。

20 代の大学生女性 2 名：1 人は教員に勧められて参加。1 人はポルトガル語を勉強中。

20 代の大学院生男性 2 名。両者とも東ティモールとフェアトレードを研究。

30 代の女性 2 名：1 人は県庁勤務の公務員で、コーヒーに興味があり、コーヒーマイスターという資格も持っている。1 人はアメリカの大学に籍を置くインターンでシンガポールからの参加した人。実は国連の職員！でした。

40 代の男性 1 名：市の公務員で被差別部落施設に勤務。アムネスティインターナショナルにも関わり、人権問題に詳しく、自身もシリアなどへのスタディツアーを企画しているとか。フルマラソンに参加するアスリート。

50 代後半の私（完全に浮いていた）は、ほっかいどうピーストレードの宣伝をしました。

30 代の東京の PARC スタッフ：2006 年 10 月から PARC に勤務、自由学校担当。

淳子さん：2001 年から東ティモールでコーヒー生産者の組合作りを支援。オルター・トレード・ジャパン（ATJ）と市場確保も行っている。東ティモール人の夫と 2 歳半の娘とディリで暮らしている。「今回のツアーではコーヒーがどれだけの手間をかけて届けられているか見てほしい」と話されている。私以外の参加者の多くは英語が堪能でしたが、ここではティトゥン語とポルトガル語が公用語で、ティトゥン語が主。インドネシア語もあるし、地方言語も使われているとか。ツアー全体の淳子さんの通訳は並々ならぬものでした。

淳子さんは「今週に入ってからディリ市内が不安定になっている。大統領選後の 6 月 30 日に国民議会選挙が行われたが、首相が決まっていない。明日（8 月 3 日）、決まる予定だが、それをめぐって、抗争があるかもしれないので、夜間は外出禁止にした方がよい」と前置きし、オリエンテーションに入りました。

○今後のスケジュール

・8 月 2 日（木）午後：①シャナナ資料館（独立闘争の英雄で私物を展示）、②サンタクル

ス墓地（1991. 11. 12 のインドネシア軍による大虐殺現場）、③岬の先のキリスト像（インドネシアが立像したキリストはジャカルタの方に向かって両手を広げている）。

- ・ 8月3日（金）午前：①ハック・アソシエーション（独立後の人権擁護団体）、②パーマティル（農業関係団体）
- ・ 8月3日（金）午後：ディリ市内でティモール料理の昼食をとり、マウベシへ。マウベシのPARC事務所で夕食後、教会泊。
- ・ 8月4日（土）～5日（日）：リタ集落——コーヒの収穫が遅れているが、少しだけでも収穫し加工させてもらう。5日の昼は収穫の始まっているクロロ集落へ行き、本格的な作業に参加。宿泊のためリタ集落に戻る。（クロロには結局6日に行くことになった。）
- ・ 8月6日（月）マウベシに戻り、夜はマウベシのスタッフと交流会。
- ・ 8月7日（火）ディリに戻り、グループに分かれて希望する所を見学。（参加者から①イカト織のタイス市場、②グリーンビーンズの加工工場見学が希望として出された。）③夕方は海岸へ行き、夕食は海沿いのレストランで。
- ・ 8月8日（水）市場見学（コモロ市場は昨年の事件で難民キャンプ場となったので、避難民が新しく作ったハリラン市場）、空港へ。

○今年のコーヒの収穫

昨年は雨期の始まりが2か月遅れ、終わりも長引いた。そのため収穫も2か月遅れで、マウベシも7月末から始まった。収穫量は例年の3分の1程度ではないかと予測されている。他の作物にも影響していて、11月、12月には厳しい状態になるだろう。（チェリーは表作と裏作が一年おきにあり、今年は裏作。さらに5年に一度、不作のときがあり、今年がそれに当たるか不明だが、近年にない不作だという。）コーヒが少ない中で、すでに、価格競争が起こっている。

○加工作業のプロセス

①木で赤く熟した実を収穫する→②加工場へ運び、ビニールシートに実を広げて選別する→③ハカリで計量→④チェリーのまま水に浸ける。浮いたチェリーは除去。（浮豆は片方にしか実が付いていないなどの不完全品。この除去した豆もディリ市内で別売りする）→⑤果肉除去（出てきた白い豆をパーチメントという。この段階ではぬめりがある。ちなみに干さない白い豆の段階からグリーンビーンズまでをパーチメントという。）→⑥水に24時間浸けると発酵する→⑦水洗いしてぬめりを取る。きれいに取らないと発酵臭が残る→⑧1週間から2週間かけて天日干し。水分含有量が10%～10.9%まで乾燥させる。

こうしたパーチメントがマウベシ生産者協同組合に集められる。その後は、ディリの業者に委託して、薄皮をはがしグリーンビーンズにする。赤いチェリー7kgで1キロのグリーンビーンズ、7分の1になる。この状態で輸出される。これらのすべての工程で、ひたすら選別の仕事を伴う。

○その他

マウベシの生産者は平均1から1.2ヘクタールを所有。赤い実を売るだけだと年間150

ドルにしかならないが、パーチメントにすれば2～3倍の収入になる。足りない分は牛や豚、ヤギといった家畜を売ったり、インゲン豆などを栽培したりしている。

マウベシ生産者協同組合では、良い商品を作るため、ワークショップを開いたり、コーヒー加工マニュアルを作成して、生産者に説明したりする等の活動をしている。

マウベシのシェードツリー（日陰樹）にはモクマオウが使われている。エルメラ県ではネムの木が使われているが、今年はネムの木が（害虫？）被害にあったようだ。エルメラ県ではピース・ウインズ・ジャパンというNGOがコーヒー支援を行っている。

コーヒーのバイヤーは、大手では、「CCT」（コーポラティブ・カフェ・ティモール／アメリカ資本）と「ティモール・グローバル」（シンガポール資本で中国市場をターゲット／今一番の大手／フレテリン政権が導入）等。CCTはフェアトレードの認証を受けているが、フェアトレードかどうかは疑問である。

オリエンテーション終了後は市内へ。シャナナ資料館には、インドネシアによる焼き打ちで炎上する家屋、泣き叫ぶ子供たち、逃げ惑う人々などの写真が、壁一面に展示されていました。人々の表情は真剣そのもので、私たちが忘れていたまなざしです。この惨事はまだ数年しか経っていないのです。隣の図書室では静かに読書する人もいました。

その後、サンタクルス墓地へ行き、ここでも虐殺の歴史を聞きました。夕方は岬の先のキリスト像を見学。海に沈む夕日がとても美しかった。

<2ヶ所のNGOで東ティモールの現状を勉強>

■8月3日：東ティモールの人権問題について

人権擁護団体「ハック・アソシエーション」ジョゼ・ルイス代表のお話と質疑応答

ハックは1996年から活動している会員制の人権擁護団体で、現在、会員は130名、スタッフ23名、学生ボランティアがいる。

東ティモールは前進ではなく後退している状況で、残念で恥ずかしく思っている。6月末の議会選後、政府高官は政権争いに執着している。避難民がいつ、元通りの生活に戻れるか心配している。今日は皆さんの質問を受けて回答したい。

Q：後退しているとは何か？生活レベルがよくないということか？

A：日本のように政治が確立していないので、政治が動くとき底辺の人に大きな影響を及ぼす。政治家は討論で闘えばよいが、人々は暴力や闘争として表れてしまう。今年の政権交代要求の動きと同時に、暴力を伴った衝突が起こり、人々は1年以上、家や職を失ったままである。独立後、小さな経済発展があり、商店経営をしたりして努力してきたが、昨年、この努力が報われずに、避難民となり、援助物資に頼る生活となった。1999年にインドネシアがすべてを焼き払っていったが、それに次ぐ第2の大きな試練といえよう。

Q：ハックの活動内容は？

A：ハックとはインドネシア語で人権を意味し、次のような人権擁護の活動している。

- ① 人々の人権がどのように侵害されているか、守られえているかのモニタリング。
- ② 政府や国連に対する交渉：支援物資が行き渡っているか、弱い立場の女性や子どもがケアされているか、避難所の状況等をモニタリングした結果から交渉する。
- ③ 問題を起こしているグループ間の紛争解決のための仲介。
- ④ 政府の役割がうまく機能するように警察官の人権トレーニングを行ったり、政府の政策にも提言を行ったりしている。

Q：人権のモニタリングとはどのようなものか？

A：避難民キャンプに毎週ボランティアスタッフが出向き、援助物資や健康等をモニタリング。毎週木曜日にその結果を政府に報告している。また問題が起きた時にはハックスタッフが出向き、警察に報告したりしている。

Q：避難民はどんな人か？援助の状況は？

A：避難民の数は2006年9月、10月は16万人いたが、地方へ避難した人もあり、2007年7月時点で3万人に減った。現在の避難民のタイプは、①家が燃やされてその後政府が整地したりして、家自体が存在しない人、②家はあるが身の危険を感じている人——これはなかなか問題解決されない、がある。ハックスタッフの中にも①の人も②の人もいる。

援助は国連と東ティモール政府から、米やテント用シートなどは平等に配分されているが、妊婦に必要なものは米だけではないように、必ずしも生活の必要を満たしているわけではない。また、政府の直面している問題は治安だけではない。避難民の生活保障がある。政府は新しく住宅を建設して入居を呼び掛けているが、避難民は生活の補填を要求している。住む場所が必要なのは確かだが、その後の生活の目処が立っていない。新しい住居の入居者は少しずつ返金して、その家を自分のものにする事になっているが、仕事がない。

Q：東ティモールの憲法は世界的に評価が高い。死刑制度廃止も明文化されているが、混乱の中で死刑制度復活もあり得るか？人権に関する法整備の現状は？

A：法制度は良いものだと思うが、問題は実施する側がとても弱いこと、政治が危ういところに問題がある。報復感情からの死刑復活についてはありえない。東ティモールの人々のメンタリティは、罪を問わず間違った人を罰しないことにある。これが誇りでもあるが、悪循環を生みだしてもいる。司法で罰しないので、人々は司法を信じなくなっている。

女性や民族など、7つの法律ができてはいるが、法律はできても実行するキャパシティが狭いことに問題がある。①人々のメンタリティ、②キャパシティ、③司法のインフラ等が課題。例えば、DV法ができてはいるが、警察は家庭の問題として解決してしまい罰さない。

Q：実行力へのアプローチは？

A：モニタリングや提言だけでなく、警察官の人権トレーニングなど行っている。

Q：失業対策へのアプローチは？

A：地方から、運転手やNGO等の仕事を求めて人々がやってくるので、年々失業率は増加している。ハックは失業対策のイニシアティブをとるのではなく、サポートをしている。ハックには経済的社会的プログラムがあり、農業と漁業の分野で政府の政策をよりよいも

のにするためのアプローチを行っている。

Q：東ティモールに対して国際社会はどのようなことができるか？

A：この間、国際社会は多くの支援をしてきたが、問題なのは援助があまりにも多くやってきて、視点がさまざまで、無駄も多かったこと。長い時間が必要なのだと思う。ハックに限って言えば、現在の人権侵害だけでなく、過去と未来についても取り組んでいる。過去はインドネシアや日本のアドボカシー、未来は農業と漁業など。

Q：軍の問題も出てきているが、軍隊についてどう考えるか？縮小するか、拡大するか、あるいはなくすか？

A：今回（昨年5月）の騒動は国防軍内の問題から起こった。国防軍はゲリラ兵として戦った人が多く、職業軍人とは違う。職業軍人としてのアイデンティティを模索している段階にある。政府は、ゲリラ兵の生活保障として軍を作ったが、構想ができあがっていなかった。ハックとしては、軍隊は必要ではなく、警察だけで十分だと思っている。現大統領は、道路整備や国連への派遣など、日本のモデルに習おうとしているらしい。

Q：日本の報道では、国防軍の除隊問題をきっかけに急に東西対立が起こった印象だが？対立はいつからあったのか？それが全面的に出てきたのはなぜなのか？

A：東西対立は一概には語れない。36の地方言語と伝統がある。ポルトガル時代から、ティモール人への迫害はあった。ビラフウ（反抗的）とカラビイ（寡黙で従順）という言葉のように、東部の人は感情的でエキサイティング、西部の人は寡黙で、閉じ込めておいて爆発するという特徴はあったが、対立の原因になることはなかった。独立闘争で西部出身の司令官は死んでしまい、国防軍の多くが東部出身者となった。独立後、生活が貧しく、物を先取りすることに戦々恐々となっていた時に、インドネシア人が出て行った住宅を兵士が利用したりしたので、東部の人たちが多くのものを勝ち取ったという印象がある。

Q：軍は元ゲリラ兵が多いと思うが、警察はどんな人が多いか？

A：警察はインドネシア警察の人が東ティモール警察の要職に就いていたりする。

事務所の庭は小さな避難民のキャンプになっていて、職員用だという。職員も避難民なのです。市内のキャンプは避難民の感情を害するので写真は撮らないほうがいいとのアドバイスを受け、職員用テントだけカメラに収めました。

■ 8月3日：東ティモールの持続可能な農業について

農業関係団体「パーマティル」エルミニアさん他スタッフのお話

パーマティルの正式名称は、パーマカルチャー・ティモール・ロロサエ。パーマカルチャーの運動はオーストラリアから始まった。パーマティルのパーマはパーマネント（永久）の意味。活動は長いが、事務所は2005年に開設された。それまでは、スタッフは無給のボランティアであった。コンスタンという国際NGOのサポートも得ている。

パーマティルの目的は、東ティモールの農業を持続可能な形で発展させていくことに

ある。苗床作りのトレーニングセンターを設立したりしている。アルテモーリス芸術集団と共同してマニュアル（英語とインドネシア語）を作成したり、家庭菜園の本やポスター、東ティモールの劇団ビビグラフと共同してフィルムを作成したりしている。（本やポスターは、識字率の関係でイラストが中心だった。）また、「EM」という、果物とココナッツミルクを原料にした有用微生物群を作り、堆肥や液肥、トイレの臭い消し、家畜の消化促進などに使っている。農民に普及する際には、作り方の説明をしている。

Q：東ティモールの土地と農産物の状況は？

A：山地が多く熱帯性の気候。10月～4月が雨季で、5月～9月は乾季だが、最近は以前のように雨季がきちんとかない。山地ではコーヒー、とうもろこし、平地では稲作、ココナッツ、トウモロコシなど。山地の寒冷地ではジャガイモやインゲン豆を栽培。くだものや葉野菜は、山地、平地それぞれにある。

Q：土壌は比較的豊かなのか？

A：豊かであればNGOの必要はない。インドネシア政府は農薬と科学肥料を普及させたが、その影響が残っている。科学肥料を使っているかどうかは、流通のよい所か否かで決まる。ディリの店にも、地方でも一部の商店にも置いてある。米などは、収穫を上げるために化学肥料が使われている。野菜もかなり利用されている。コーヒーのように手間をかけない作物には使われていない。農薬についてもほぼ同様である。害虫が多い場合、農薬に頼ってしまう傾向がある。ボコナロ県のマリアナでは、広大な平地に水田が広がっているが、広範囲に害虫が発生したことがあり、政府に相談したところ、農薬の空中散布を行った。2003年と2004年にも同じようなことが起こったが、政府には相談せず彼ら自身の伝統の方法で解決した。害虫は誰かが呼んだやつがいる、追い出す方法はあるはずだと。その後、政府が2度目の空中散布を行った結果、今度は害虫がコントロールできなくなった。マリアナでは、今年、イナゴが大発生し、稲が採れなかった。

Q：科学飼料の価格は？ 実際には買える価格なのか？

A：20kg 10ドル（PSP）～25ドル（ウレフ）。

Q：プロジェクトとしては循環させることだと思うが、化学肥料は土壌のためによいか？

A：化学肥料は土壌を悪くすると考えている。

- ① 土壌を回復させるためには有機物を投入するしかないが、5年以上かかる。化学肥料に依存してきた農民たちの意識を変えるのも時間がかかる。
- ② 移動型の焼畑をしているが、環境や循環のためには障害になっている。微生物も殺してしまうし、雨をためておくシステムもなくなってしまう。山間地の土地が痩せてしまう。人口増加により、一人当たりの畑が少なくなり、土地を休ませることができなくなった。

Q：山に木が少ない印象だが？

A：①雑草すら生えない土地、②焼畑や薪用に伐採したため、③インドネシア時代にゲリラ兵を探すために焼き払われた、などが考えられる。キコリとして生活している人もいて、今も木はどんどん減り続けている。東ティモールでは大多数が薪を使う。パンを焼くのに

も薪が必要である。

Q：木の減少に対する活動は？

A：植林のための苗木作りとかまどの普及を行っている。一般の人は、大きな石 3 個を置いてその間に薪をくべて調理しているが、かまどにすれば熱効率がよく、薪 2、3 本で済む。トリスカイでは自分たちがかまど作りをして使っている。かまど作りのマニュアルは 20 ドル、他の NGO では現物を 5 ドルで販売している。

Q：パーマティルの活動で一番の障害は？

A：人々の習慣を変えるのが難しい。有機の必要性を説明しても彼らは彼らのやりかたでやる。有機がよいとわかっても、なるべく早く収穫したいので、健康を害しても土地を悪くしても、成果のよい方がいい。

Q：コーヒー以外の輸出作物はあるか？

A：今のところコーヒーしかない。米は供給すら足りない。^{注 2)} 少しだが、キャンドルナッツがインドネシアに輸出されている。ココナッツの燻製をオーストラリアに輸出したことがあるが、害虫被害で中止になっている。その他では、CCT が、バニラの栽培を試みたり、インドネシアに牛を輸出したりしている。

注 2) 直前に東京の PARC 事務所から送られてきた資料には、外務省の情報として「2007 年 3 月、米不足となり、米の略奪事件が起こるなどしたが、政府の緊急輸入米が市場に出回り、騒ぎは沈静した」とあったので、米のことは私の頭からすっかり抜け落ちてしまい、質問するのを忘れてしまった。この場で聞けばよかったと悔やまれます。

<生産者と出会い、収穫と加工作業の実習>

■8 月 3 日午後：マウベシへ

昼食は庶民的なレストランへ。東ティモールの代表的な料理で、鳥のから揚げがおいしかった。鳥も豚もその辺を走り回っていますから、ブロイラーとは大違いです。昼食後、チェリーの収穫で使う背負い籠の購入にハリラン市場に立ち寄りしました。昨年の事件以降にできた市場で、野菜や雑貨が並び、女性がたくましく働いています。食肉店では男性数人が小枝でゆるゆると蠅を追い払っていました。売れるまで続けるのでしょうか。籠は 1 個 0.5 ドル、9 個購入。昨日の夕食に食べた小さなチリを見つけ、自分用に 2 山 1 ドルで購入。その後、マウベシへ。ガードレールのない、時々陥没している悪路でしたが、PARC スタッフの運転はとても上手で、急坂のくねくね道を一気に上って 2 時間半。標高 1500 メートル、山間のマウベシに到着しました。肌寒いくらいの気候です。

夕食を PARC のマウベシ事務所でごちそうになり、PARC スタッフのネルソンさん、アダウンさん、マリートさん、アメタさん、アンジェリーナさん、マウベシ生産者協同組合のビクトリーナさん、アフォンソさん、ヘンリケさんと自己紹介などしました。

女性スタッフ、アンジェリーナ・トレラさんは組合員の女性プログラムに取り組み、

お菓子作りやせっけん作り、家計簿付けなども試みているという。彼女は今年のチェリーの収穫などについて、次のように説明してくれました。

今年は、雨季の始まりが遅く、例年になく実の付きがよくない。収穫のある人とないに分かれてしまった。表作、裏作があり、去年は葉が少なくて実が多かったが、今年は実が少なくて葉が多い。例年なら、10月半ばに最初の雨が一度降って花が咲く→雨が止み、結実して花が散ってから、また雨が降る→実が大きくなる。ところが去年は12月になって雨が降って1週間以上止まなかった。花は咲いたが、1週間の雨で結実せずに散ってしまった。以前はこのようなことが起こったことはない。その他では害虫の被害もある。また、収穫を上げるためには畑の手入れも必要で、間引きや剪定、台切りして再生を図るなど、大変な作業である。

■8月4日（土）～5日（日）：リタ集落へ

大小の山々に囲まれたマウベシは、あちこちの谷間から霧が立ち上り、とても美しい朝を迎えました。宿泊所の教会から讃美歌が聞こえてきます。眼下の斜面には民家や畑が点在し、のんびりと草を食む家畜も見えます。丘の上のホテルは、裾野が雲に囲まれて「天空の城ラピュタ」のようです。今日から、少し南のマウラオ村リタ集落で2日間を過ごすのです。コーヒーの収穫が遅れていることから、本格的な収穫作業の実習はクロロ集落で行うことになりましたが、リタ集落の人たちは、このツアーをとっても楽しみにして準備もしているからと、2泊することになったのです。

マウベシの市場で10数人2日分の野菜を11.5米ドルで、卵は10個2ドルで購入しました。自国の貨幣がないのには驚きますが、小さな南の島国ではあることなのだとか。昨日のディリからの道は、悪路とはいえ舗装道路でしたが、リタまではでこぼこだらけの粘土質の赤土の道です。車は大きく上下左右に揺れます。人が歩くための道なのでしょう。

リタ集落は、マウベシ生産者協同組合の中では、最も収穫量が多く、一人あたりの耕作面積も比較的広く、メンバー数も40名と多いそうです。地域の言語はマンバイ語です。

加工場の場所決めは、①水源の確保、②豆の乾燥面積、③道路へのアクセス、が条件です。車を乗り入れることができる、小高い丘の上の大きな広場が加工場になっていました。見晴らしがよく、マウベシの町も見えます。集落の民家はかなり離れて点在しています。

広場には、チェリーをパーチメントにするためのコンクリート製の水槽群や新旧の作業小屋があり、新築の小屋の脇にはパーチメントを乾燥するための畳大の干し網が100枚ほど積み上げられています。1km先の水源から太いホースで水が引かれています。この新しい作業小屋が私たちの宿泊所兼ダンスパーティー会場になります。少し離れたところにシートで囲まれたトイレが設置されていました。どこかのNGO寄贈の便器はコンクリート製で、横の大きな水槽には水が引かれています。その水を汲んで流す「水洗トイレ」なので、まったく匂いません。流した先はどうなっているのでしょうか。クロロへは結局翌々日、マウベシに帰る途中に行くことになり、ゆったりとした2日間がはじまりました。

■ボールさえあれば言葉はいらない！

今回の旅では日本からお土産を運ぶことも私の大きな使命でした。私は、先述したように、北海道で東ティモールコーヒーを広めようと発足したほっかいどうピーストレード（HPT）のメンバーです。私のツアー参加が決定してから、一昨年にこのツアーに参加したことがあるHPTメンバーと仲間たちが、「娯楽のない国だから」「子供たちに喜んでほしい」と札幌市内を奔走し、コンサドーレ札幌からサッカーボール6個、清田高校からバレーボール10個とネット、札幌YWCA会員（HPTのメンバーでもある）からリコーダー3個やピアノカ3個も寄付してもらい、私の旅に託したのです。中古のボールは一つ一つ手洗いし空気を抜いて箱詰めされたそうです。バリのデンパサール空港で荷物（大きな段ボール箱）を開けさせられた時はヒヤッとしましたが、無事に到着しました。みんなの思いがここに届いて、本当によかった。

昼食前に、リタ集落用に持参したボールで、ツアーの若者たちが遊び始めると、少年や大人が次々と集まってきて、バレーボールに加わり、チームに別れてサッカーの対抗試合まで始まりました。みんな足が速く、とても上手です。ボールより早く走る球拾いの少年もいます。ボールさえあれば、言葉は不要。ツアーの若者も仲良く加わって、日が暮れるまでプレイしていました。小学校にあったボールがパンクして以来できなかったそうで、久しぶりのフィーバーなのでしょう。淳子さんは、「組合員があんなに楽しそうにしているのを初めて見た気がする。いただいたボールは各集落に配って対抗試合を計画してみたい。そうしたら、組合員の交流と結束も深まるでしょう」と話されていました。

ワーツと集まってくるはずの小学生がいないのは、今、夏休み中だからでしょう。ボールを見て喜んでくれる子供たちの顔が見られなかったのは残念でした。

ところで、この国は、どこへいっても子供がたくさんいます。きょうだいと思しき5、6人がくっつきあって過ごしています。7、8歳のお姉ちゃんが、赤ん坊を背負い布で胸にぶら下げている姿もよく見かけました。上の子が下の子の面倒をみているのです。淳子さんに聞くと、合計特殊出生率は7.8で世界第一位。女性たちは次々と子供を産むためか、あまり長生きはできないそうです。子供がたくさんいることが家族の幸せでもあるけれど、実は、少し間隔をあけて子供を産みたいと思っている女性もいるそうです。

■手間暇のかかるコーヒー畑の手入れ

昼食後に組合活動に取り組むシコさんに案内してもらい、集落を見学しました。

小学校は昨年完成したばかりのクリーム色の近代的な建物です。政府が建設資金を出し中国系の建設会社が建てたそうです。夏休み中で誰もいませんでしたが、リタ地域の子供たちがみんな通っているそうです。学校に行く年齢はまちまちで、中学生くらいの年齢の子もいるとか。校長はマウベシの人で、教員9名のうち3名はボランティアです。テキストは先生だけが持っていて、生徒のテキストは板書のみ。また、2006年に選挙で選ばれた3名の集落長は公的な問題意識が高く、成人向けの識字教育も始めています。政府の識字教

育に組み込むと開始までに時間がかかるので、PARCの支援を得ているそうです。

続いて畑へ。シコさんがていねいな説明をまじえます。

マウベシには62集落がありますが、ほとんどがモコというコーヒーです。アラビカ種にはアラビカとモコがあり、アラビカはポルトガルが持ち込んだ原種にちかいもの、モコはアラビカとロブスタの混合でサビ病に強いものです。去年は雨期が2カ月も遅れ、収穫もこれからです。畑のチェリーはまだ青いもののほうが多い状態でした。(今年の収穫量は3分の1というきびしい予測も聞きました。たくさん収穫できるといいのですが。)

マウベシの組合で、①豆の品質、②グループ内の問題解決、③協働、④コーヒー畑改善への取り組み、で評価したところ、リタは2位(1位はレボテロ)で、特に④について高い評価を得たそうです。その評価通り、畑はよく手入れされていました。コーヒーの木は1メートル80センチくらいのところで剪定し、しだれ桜のように横広がり実に実が付くのがいいようです。また、根元の下草が刈られ、枯葉は根元から離して、円形に囲むように脇によけてあります。虫の害と根元の腐敗を防ぎつつ、肥料にするためです。

シェードツリー(日陰樹)の植林も見学しました。この地域はモクマオウという木が使われています。葉は松のような形状ですが、アスパラガスの葉のようにやわらかな印象です。直射日光を防いでいますが、暗くならず適度に光も入り、風も通るようです。

急斜面には段々畑のように、1.5から2メートルおきにテラスという畝道が付けられて、土壌の流失を防いでいます。モクマオウも1.5から2メートル間隔で植えられています。5年経つと2メートルくらいに育ち、コーヒーの木が植えられます。コーヒーは8年くらいして収穫できるそうですから、13年計画です。

コーヒーは、その後15年目くらいまでは収穫が上がるけれど、だんだんとれなくなるので、15年を境に、地上30センチほどで台切りします。台切りした2年後からは少しずつでも収穫できるようになります。計画的に、まとめて台切りします。また、台切りした木の近くには穴を掘り、下草を入れ、肥料にします。

モクマオウとモクマオウの間にマメ科のテプロシアという木も植えられていました。これは比較的新顔のシェードツリーです。モクマオウより成長が早く、葉は肥料にもなるし、枝先が丈夫なので木材を結わえるのにも使えます。

1メートルほどに育ったモクマオウに「マツクイ虫がいるよ」と、シコさんは器用に虫を掘り出します。食われた下の所で切れば木は大丈夫なのだそうです。

そして苗床も見学。ウネが5、6列、きれいに草刈りがされ、今は野菜が植えられていました。コーヒーの収穫が終わったら、水に浸けておいたコーヒー豆をウネに蒔き、芽が出たらよいものを選びポリパックに移します。苗床の横にはコンポスト(丸い穴)が掘られていました。牛フンや草、灰などを入れ、堆肥が作られます。コーヒー畑の手入れも、多くの手間と時間がかかることがわかります。

帰りには水源に立ち寄りしました。きれいな水がわき、クレソンが茂っています。水源は神聖で、主のナマズが住んでいます。ナマズは捕ったり食べたりしてはいけません、集

落の人たちは虫を捕まえてきて枝に結び、水面に垂らし、大きなナマズが食いつくのを見せてくれました。珍客到来だから、ナマズはゆるしてくれたに違いありません。

■満天の星の下でのダンスパーティー

日が暮れかかり、女性たちは古いほうの作業小屋で夕食の準備をしてくれています。土間には大きな石が三つ置かれ、薪がくべられ、白米の大鍋が乗せられています。東ティモールの稲作は供給すら足りないと聞きましたが、米は食事には欠かせないのだそうです。ここではまな板というものがなく、野菜は両手で処理。小さなジャガイモもきれいに皮がむかれ、手で持ちながら切ります。インゲンの斜め切りもキャベツも利き手で手前に引き切りです。ディリの市場で自分のおみやげ用に買ったチリを供出し、作り方を教えてもらいました。油で揚げたからニンニクと一緒に石の上で潰し、塩で味付け。めちゃくちゃ辛いけど、チリのいい香りがします。野菜中心の料理はヘルシーでとても美味でした。

山の天気は変わりやすいけれど、夜になるとすっかり晴れて、空には南十字星や白鳥座など、満天の星。天の川もはっきりと見え、時々星も流れます。光がないから、美しさは格別なのでしょう。そこへ男性陣が発電機を運んできて、電気が点きました。発電機は集落で購入し、使わないときは10ドルで貸しているそうです。音楽も鳴り、小学生もやってきました。人々が次々に集まり、小屋の外まで、あふれかえってしまいました。さんざん遊んだ後でしたが、ボールの授与式も行われました。そして、いよいよダンスパーティーです。ダンスは男女ペアが基本で、難しいステップでリードするのは男性なので、男性にはハードルが高いようです。ツアーの若い女性に、順番待ちの男性の列が整然とできているので、笑ってしまいました。小さな子供たちは笑顔で見学です。私は長老めいた男性と1曲。若い人に手を引かれてやってきたのに、ダンスとなるとしゃきっとするのは。リクエストされ、3曲も踊ってしまいました。こうして朝の3時までパーティーは続いたのです。

■8月5日：収穫と加工作業

翌日は料理上手な女性の畑でチェリーを収穫させてもらいました。高い枝は引っ張って、真っ赤に熟した実だけを選んで、実の付け根は採らないように注意しながら、一つ一つ摘みます。3人の若い女の子たちがやってきて、急坂の畑を上り下りし、あっという間に私たちの倍量を収穫していました。子供たちも立派な労働力なのです。

加工場に帰ってからチェリーの処理を学びました。チェリーを選別し、水に浸けて浮豆を除去し、果肉を取り除き、パーチメントにします。この日はチェリーが少量なので手動式の果肉除去機を使用しましたが、モーター付きのものを2003年に購入したそうです。

経理と機械担当のマルコスさんは「昔はきれいな豆しか買ってくれなかったが、インドネシアが来た後、1980年頃から、インドネシア人やティモール人、華人など様々な人がどんなものでも買うようになり、品質が落ちた。また、ポルトガル時代は遠くへ行くことが禁止されていたのでマウベシで売ったが、インドネシア時代はどこで売っても良くなった

ので、いろいろな人が買いあさっているディリの方が高く売れた。価格は買い手の言い値で決まる」などの説明をしてくれました。コーヒー以外で生活を支えるものは？との質問には、コーヒー以外にはないと即答。コーヒーの売り上げをとっておいて、少しずつ使うのだそうです。

■ロウソクの灯火で勉強会

夕方になって小屋に戻ると、淳子さんを囲んで自然発生的に勉強会が始まりました。大学院生のレポート用紙にはすでに質問項目がびっしりと書かれています。淳子さんはお疲れの中でずっとつきあってくれました。だんだん暗くなって蛍の光ならぬロウソクが灯され、メンバーも円座になります。経済的な難しい話でした。わかるところだけ紹介します。

マウベシでは平均年収が 150 ドル（組合員はその 2 倍くらいはある）。コーヒーの収穫が終われば蓄えは 3 ヶ月でなくなる。人々の生活で最も出費の多いのは伝統的な冠婚葬祭のしきたりで、収入の 7~8 割、時には数百ドルかかる。お金のないときは近隣に借金をしてでも行すが、利息は 10 割、2 倍にして返さなければならない。

組合はパーチメントを 1kg 1.93 ドルで購入している。最高品質を想定した、これ以上は値上げできない金額である。CCT はチェリーを 1kg27 セントで購入。5kg のチェリーで 1kg のパーチメントになるので、パーチメント価格は 1.35 ドル。組合はマウベシの生産者をすべて組織化していなので、CCT の価格は無視できない。組合が CCT より高く買わないと他に売ってしまう可能性がある。（そういえばマウベシでは、黄色い CCT のトラックが走りまわっているのを、あちこちで見かけました。）

2004 年 10 月に協同組合法が制定され、組合員と組合の取り分が決まった。共同売り上げの 70%が生産者、30%が組合。組合分 30%の内の 60%は生産者に還付金として戻し、残りの 40%が組合の資金になる。組合は 07 年 7 月に口座を開設することができた。毎週土曜日に各集落から 1 週間分のパーチメント代金を取りに来ている。

パーチメント以降では、保管料、輸送量、グリーンビーンズへの加工料（業者委託）、麻袋代、輸出業者の手数料などがかかるので、輸出価格は 3.21 ドルになる。A T J では年間 36 トンを輸出。1 コンテナは 18 トン積めるので、コストを下げるためにはかなり量を増やす必要がある。

その夜は集落で葬儀があるとのことで、前日と比べて静かな交流会となりました。私の職場関係で薬局が集めてくれた 250 本のボールペンをリタ小学校へ寄付することができましたし、大学生も持参の折り紙を女の子代表にプレゼントしていました。

人々の温かいおもてなしを受け、ゆったりとした、でも濃厚な 2 日間でした。夜の勉強会で、フェアトレードとは？の問いに、淳子さんが「フェアトレードは消費者にとってのフェアである」と話していたことが心に残っています。現在はまだ消費者主導という意味だったのでしょう。その続きを質問すればよかったと少し後悔しています。

■8月6日：クロロ集落へ

リタから車で5分ほど走ってから、徒歩でクロロへ向かいました。なだらかな山里の小道が続き、両脇の斜面にはマメや野菜の畑が広がっています。先頭の大学院生2名はシコさんとマンバイ語と日本語を仲良く教えあいながら歩いています。途中で川を渡渉し、急な上りを上って、リタから1時間余、急斜面に張り付くようにクロロ集落がありました。

加工場は比較的平らな広場にありましたが、もともと坂にある集落です。加工場の面積はリタ集落の3分の1か4分の1くらいでしょうか。畳大の干し網が50枚ほど台の上に並べられ、白いパーチメントが干され、数人が選別していました。ビニールシートには浮き豆も別に干されています。干し台の脇にはチェリーをパーチメントに加工するコンクリート製の水槽が、傾斜を生かして3段に作られ、水も引かれていました。今年は7月23日から本格的な収穫作業に入ったそうです。作業小屋には袋詰めが終わった麻袋が20個ほど積みまれています。小屋の表には顔写真の張られた、作業分担表が貼られています。1グループを2班に分けて週交代で役割を振り分けているそうです。

いよいよ私たちも収穫です。急斜面のコーヒー畑で、今日は案内の集落の人が摘み方を指導してくれました。1時間ほど夢中で収穫しましたが、ここでもワーツと数人の子供たちがやってきてあつという間に多量収穫しながら、時々私に東ティモールの歌「Masi Olarinda」を教えてくれてクスクス笑っています。ラ行の巻き舌が、よほどおかしかったようです。

加工場に帰ってから収穫したチェリーをシートに広げて点検し、完熟していないものや虫食いなどのものは除かれます。それから秤で計ります。坂なので、秤の下に石を置いて高さを調整するのですが、かなり時間がかかっていました。正確さをアピールする必要があるようです。私たちのチェリーは合計で24kgありました。続いて、水洗いし、浮き豆を取り除き、果肉除去機で果肉を取りました。果肉が残っていたら一粒一粒、手作業できれいにします。それから24時間水に浸け、洗ってから乾燥するそうです。

そのうちに、急に雨が降ってきました。みんなで急いで干し網を重ねビニールシートをかけ、風で飛ばないように材木を載せました。気の抜けない仕事が続きます。

組合員の男性は次のように話していました。

収穫が始まったので、朝は8時から収穫し、午後1時から加工場でメンバーが持ってきた豆の加工が終わるまで夜になっても作業する。日曜日でも働く。組合に加入しているのは27世帯。平均年収はだいたい200ドル代。昨年の収穫量は1トン強が虫にやられたため6トン弱。今年、虫食い豆はないようだ。組合に参加する前はチェリーを馬に載せてマウベシやアイナロまで運びCCTに売っていたが、組合に参加してこの苦労がなくなった。子供たちにも、組合活動を続けてほしいと思っている。

■東ティモール・ウルルン滞在記

雨が本格的なる中、急坂を下って、往路に渡渉した川まで着くと、車が待っていてくれました。道はどこにあるのだろうか？と不思議でしたが、実は河原を走って来たようです。

オフロードレースそのもの。時にタイヤがはまったりしながらマウベシへ帰りました。

夜はマウベシの PARC 事務所で交流会。マウベシのスタッフとのお別れ会でもありました。日本チーム対東ティモールチームの歌合戦も終わり、みんなの挨拶がありました。スタッフとすっかり仲良くなった大学院生は感極まって泣いてしまいました。みんなの目にも涙が光っています。「世界ウルルン滞在記」の様相です。みんな、この出会いを大切に、それぞれの場で、東ティモールコーヒーを広げていってくれるでしょう。フェアトレードって何？ きっと、こういうことではないか、と。私もほっかいどうピーストレードでがんばるぞー、と思ったのでした。

■8月7日午前：ディリへ

昨晚から、政情不安を反映してか、マウベシの PARC 事務所の屋根にも投石が何度かありましたが、7日朝、ディリでは投石事件が相次ぎ、空港近くに事務所がある YMCA の車の窓ガラスも割られ、港の税関関係の建物は焼き打ちされたという情報が入りました。

国民議会選挙では、第一党のフレテリンが過半数割れをし、第二党の CNRT が他の 3 党と連合を組んだので過半数超えとなりました。議会で首相を決めることになっていましたが、フレテリンが拒否。そのため、ラモス大統領が CNRT のシャナナ氏を首相に任命。それに反抗するフレテリン派の人たちが騒いでいるのだそうです。淳子さんが携帯電話の通じる所で情報収集しながら、私たちはディリへ向かいました。役所や空港、港以外は平穏なようだったのですが、途中、避難してくる車とすれ違ったりしました。

■8月7日午後：生豆の加工工場

街中は平穏だとはいえ、車の窓をしっかりと閉め、ロックも掛けてディリ市内へ。建物の落書きは政治的なものばかり目につきます。タイス市場でお土産を買った後、ティモール・グローバルの加工を請け負っている工場を見学させていただきました。

工場の中には白い麻袋が屋根まで積み上げられ、これは米のようでした。ベージュ色の袋の山がコーヒーです。中国への輸出でしょう、漢字で「豆粕」と書かれていました。豆の乾燥状態を計る機械もありました。奥には背の高い機械があり、上から作業員がパーチメントを入れると、シルバースキン（薄皮）が剥かれて落ちてきます。これがグリーンビーンズ（生豆）です。下には大きな受け網があり、作業員が豆を広げると網を通して大きさに選別されるようになっています。A と B サイズが輸出用で C サイズが国内用だとか。ティモール・グローバルの仕事をする前から働いているというベテラン作業員は「まだ完全に乾いていない状態で、脱穀がうまくいかない。できればやりたくないがボスの指示なので仕方がない。脱穀してから乾かすことになる」と話していました。このような加工場は市内に 4～5 所あるそうです。トラックが着き、パーチメントの計量が行われていました。若い作業員たちは、「乾燥が 1 日だけしかされていないし、あまりよくないので 1kg80 セントで買って即金で払った」と説明してくれました。

夕方はキリスト像を裏にまわった所のビーチへ。ほっかいどうピーストレードのメンバーから、PARC のプライベートビーチがあるらしい（勝手に決めた人がいるらしい）と聞いていたので、淳子さんに尋ねると、少し遠方のような感じでした。でも、ここも誰もいません。どこへ行ってもプライベートビーチのように静かです。夕日が赤く映え、雲の色が刻々と変わります。みんなで白い砂の上に「PARC 2007」と小石を並べて記念撮影しました。この美しい景色のように、この国が平和で希望に満ちたものでありますように。

夕食は浜辺のシーフード・レストランへ。行く途中、無口の運転手・アメタさんがラモス大統領の家だよと教えてくれました。警備の人がたくさん見えました。

■8月8日：帰国の途に

朝食後、淳子さんも交えてツアーの「見返り」が行われ、感想などが話されました。

- ・一緒に行動してみんなの感想が聞けて、ツアーでの参加もいいなと思った。
- ・途上国と言われていても、人の考え方は同じだと思った。
- ・言葉で伝わらなくてもギターやボールで交流できた。
- ・向学心に火がついた。
- ・帰国したら東ティモールコーヒーをもっと広めたい。
- ・東ティモールがよい方向に行くように、活動している人がいっぱいいると思った。
- ・暗いイメージを抱いていたが、人々は明るかった。
- ・開発援助など、外からの関わりは、何らかの影響を与えてしまうと痛感している。
- ・女性は笑顔もいいしパワーがある。女性プロジェクトの成功も期待している。

最後に淳子さんの感想です。

作業のピークに参加してもらえなかったが、皆さんが生産者との交流を楽しまれているよかったです。このツアーは、コーヒーという「モノ」について学ぶだけでなく、お互いに変化することを実践する場として、これからも続けていきたい。2001年に私が東ティモールに来たときは、みんながインドネシアからの分離を勝ち取ったことを熱く語ってくれ、希望に満ち溢れていた。4~5年経つうちに、希望だけでは生活できず、不満を募らせてばかりいることが残念だ。いつまでも希望を持ち続けられるような活動をしていきたい。

終了後、空港周辺は安全とはいええないからと、私たちは国連に警護されながら空港へ向かうという、めったにできない体験もしました。空港の建物に入ると、テレビでジャナナ首相の就任式が放映されていました。ディリの大統領府で行われているライブのようでした。シンガポールに帰る参加者の「家に着くまでが旅ですから、気をつけて」という気遣いの言葉に送られながら、この国の平和と希望を祈りつつ飛行機に乗ったのでした。